

伝統の技をつないで160年 櫛石と現代の石工：青木清二

Preserving the tradition of stonemasonry techniques for 160 years

Kunugi-ishi and Stonemason: Seiji Aoki

和田晴美*¹・青木清二*²

Harumi Wada and Seiji Aoki

キーワード：石工，石工の技術，青木家

Key words : stonemason, traditional techniques of stonemason, The Aoki family

はじめに

移動手段も運搬手段も限られていた頃，人々は地域にある資源を見つけだし多様な用途で利用してきた。下仁田町や南牧村あるいはその周辺でも，大地に眠る資源のさまざまな利用が見られたが，その利用は現在ほぼすべて終わっている。その中で一ヶ所，櫛石と呼ばれる石材の切り出し・加工を続けている場所がある。そこには江戸時代末期から現在まで5代にわたって石工の仕事が続けてきた青木家が石材店を構えている。青木家5代目の青木清二が，その歴史と仕事を解説し，さらに仕事への思いを語り，和田晴美がその聞き取りと資料をまとめ，ここに報告する。

まずはこの地域の地下資源の概略を記す。

利用された地下資源

南牧・下仁田地域には多彩な地質環境があり，それに伴って多くの種類の地下資源の利用が見られた。古くから利用されたものもあれば戦中戦後や近年の一時期の利用もある（第1図）。



第1図 南牧・下仁田周辺の鉱山跡分布

砥石（砥沢）・石灰石（青倉 その他）・鉄鉱石（中小坂鉄山）・鶏冠石（西ノ牧鉱山）・輝安鉱など（中丸鉱山）・滑石や蛇紋岩（三波川結晶片岩地域）・碎石（大桁山 他）。他にも小規模な採掘跡や試掘跡が散見される（和田 2022）。なお，砥沢地域では金の採掘の試みられた場所もある（佐藤 2001）。

櫛石の産出場所と石の紹介

今，日本では石材の多くは輸入品であるが，かつては重くかさばる石は運搬も難しく，地元や近隣で

2026年1月19日受付．2026年2月10日受理．

*1 下仁田自然学校．下仁田自然学校．群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1.

Shimonita Natural School. Aokura 158-1, Simonita-machi, Kanra-gun, Gunma Prefecture, 370-2611, Japan.
nenasi@juno.ocn.ne.jp

*2 群馬県甘楽郡南牧村盤戸

産出する石が多く利用されていた。

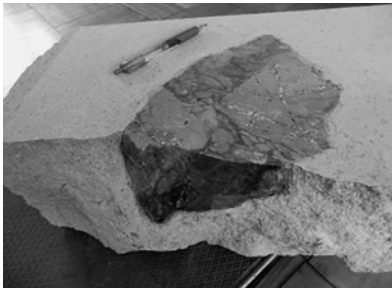
柵石の採掘地は、群馬県の南西部に位置する南牧村の南東部・磐戸地区柵である。この石は地下からマグマが脈状に入り込み、冷え固まったもので、柵地区から松沢地区にかけて分布している（佐藤 2002）。地質年代は、後期中新世から鮮新世の活動である可能性が高い。岩質はデイサイト¹⁾で、灰白色の色調を示す（第2図、口絵1）。



第2図
柵石石切り場

岩石中には細粒の斜長石の斑晶が見られ、変質した小粒の有色鉱物もわずかに見られる。不透明鉱物はほとんどが微粒の磁鉄鉱である。（佐藤 2010）。

柵石には、まれに異質岩片が含まれていることがある。地下からマグマが上昇してくる時に、周囲の岩石を取り込んだものだ（第3図）。石材として利用するには異質岩片は邪魔ものだが、一方で、地下の情報を伝えてくれる「地下からの手紙」ともいえる。



第3図 捕獲岩



第4図
南牧村のお墓

柵石は南牧村や下仁田町では墓石や灯籠^{とうろう}、石垣などにたくさん使われてきており、道路わきの石垣や古い墓石などに見ることができる（第4図）。

柵石利用の歴史

石材として利用できるこの石を見出し利用したのは、信州高遠の石工たちだった。江戸時代のことである。高遠は現在の長野県伊那市にあり、ここでは元禄時代から石工職人の出稼ぎが奨励され、5人一組で石工が各地に派遣されてきた。石工の家の次男・三男にとっては、技術を身につけ出稼ぎに行くことは、仕事を得る機会となったはずだ。出かけるにあたっては、「乱暴するな・脱藩はしない」といった誓約書を書いたとのことである。その足跡は広く、全国18都府県におよび、遠くは青森県から山口県にまで広がっている。高遠藩には「石切り目付^{めつけ}」と呼ばれる役人がいて、それぞれの石工の所在、仕事等の情報を管理し、運上金を取り立てていた。江戸時代にこうした広範囲のネットワークを張り巡らせていたとは驚きだ。

江戸時代元禄の頃からは庶民が墓を持つようになり、墓石の需要が高まった。仏塔、石のほこら、石仏など、さまざまな需要も生まれている。石工たちにとっては、こうしたものを作るためのすぐれた石材を探すことも大切な仕事だったであろう。

南牧村磐戸神社には、柵石の大きな常夜灯がある（第5図）。刻印に寛政十年（1798）作製で高遠職人の作とあるので、それ以前から柵石は利用されており、高遠石工が働いていたことが分かる。

石材としての柵石の特徴は、硬すぎず柔らかすぎず加工しやすいことである。水分を吸収しにくいので、雨風にさらされても風化しにくく角持ちもいい。光の反射を抑え目にも優しく、車のライトなど当たってもまぶし



第5図 磐戸神社常夜灯

くないといった特徴もあり、古くから現代まで、利用されてきた。

石工の仕事

石工の技術と道具

かつて石工たちは手に持った道具だけで石を切り出し、割り、磨いて仕事をしてきた。すべて人の力によつての作業だったわけだ。

石工の仕事は、〈1〉採掘・石を切りだす（第6図）、〈2〉石を運ぶ、〈3〉加工・目的にあわせて成型する、と続く。

現在〈1〉の採掘には火薬を使い、発破をして石を落とす。火薬のない昔は岩石の割れやすい方向（石目）を見定めて、道具の一つ・矢を入れて割っていく。石目を見るのが熟練の技だ。技術もさることながら、体力のいる仕事であった。〈3〉の加工では、石を割るのに、今ではドリルのような近代的な道具があるわけだが、青木石材店の5代目青木清二はノミと玄能、鉄の矢を使い昔ながらの手作業で成型している。江戸時代そのままのようで「そんな時代じゃない」と言われそうだが、手作りにこだわっている。

石工としての思いを語る言葉に耳を傾けてみたい。

「ドリルで穴をあけるのは近代的なのですが……その穴のあとが残って見えるし、人の手を使って割る方が自然な感じでいい。」「それだけではなく石には表情があるんだよ。それぞれ違う顔があり、石をみて、石の顔にあった品物を作るのがいい。」「この石をどう使ったらこの石を生かせるか。目で見て、石の肌に触れることで見極める。これが熟練の技。みんな石積み（石垣）にするのじゃなくて、石の顔にあった作り方をしたい。この石はテーブルがいい、ベンチがいい、とか。それでお客様に喜んでもらえたら、うれしい。どんな石にもそれを生かす場があるはずだ。」切りだした石は、石目をよく見て、自分の手で無駄のないように割っていく（第7図、口絵1）。そうしたこだわりがある。

石積みにも、いろいろ教えられるという。



第6図 採掘場
三代目青木庄市郎
と職人たち



第7図 成型作業
五代目青木清二

「石垣を積むとき、1個を6個の石で囲んで支えあっている。人間もそうならなくちゃダメなんだよ。」「どの石を組み合わせるか、よくわかる人がいる。どんな石も、どこかに収まるものだよ。人も同じ。立派な城主というのは、石垣と同じように、たとえどんな家臣でも、役立つところを見つけ配置できる人なんだ。」

石をいとおしむ気持ちが、ひとり一人を大切にす
る心にもつながっているのだろう。

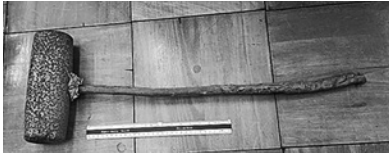
石工の道具

櫛石の石切り場で使われた、石工の道具を写真で紹介する（第8図、口絵1）。

大玄能（第9図）、セットウ（第10図）、コヤスケ（第11図）、ピシャン（第12図）、チョウナ（第13図）、ノミ（第14図）、矢（第15図）、かなてこ（パール、第16図）。



第8図
石工の道具
（スケールは30 cm）



第9図 大ゲンノウ（玄能）
“矢”の頭をたたく8 kg～12 kgの重量がある（スケールは30 cm）。
小型のもの（小ゲンノウ）は石の形を整えるために使う。



第10図 セツウ（石頭）
ノミやコヤスケの頭部をたたく小型のハンマー。
重量は1.2 kg～1.5 kg



第11図 コヤスケ
一方に刃があり、もう一方を槌でたたいて、石を大きく割りはがす。石を割ったり、石材の角を取って形を整えたりする。



第12図 ビシャン
粗い石の表面をならす道具。石をたたく槌の面に格子状に四角い突起が並んでいる。これでたたくと風合いのある表面仕上げとなる。すべり止めの効果もある。（格子の大きさは大小いくつかある）。



第13図 チョウナ（手斧）
石の表面を削ったりたたいたりして平坦に整えるための伝統的な道具。飛鳥時代（7世紀）頃から使われてきた。刃で細かく平行な線を刻んでいく石材の表面仕上げ方法を小たたきとよぶ。なお、木材用のチョウナとは形や強度が異なる。



第14図 ノミ
矢を打ち込む穴を作る道具。穴に矢を入れることで、石に亀裂を発生させ、割る。用途に応じて種類がある。発破の火薬を詰める穴をあける時にもノミを使用。



第15図 矢
石を割るための専門道具。ノミで掘った穴に矢を打ち込み、石を割る。この時、経験と勘で「石の目」（割れやすい面）を見定める。日本の伝統的石工技術を支える重要な要素。（スケールは30 cm）



第16図 下仁田駅より東京へ向けて出荷
鉄製の棒状道具・かなてこ（パール）を使っている。8人分の力を出すという意味で、「テコ8人」という言葉がある。
写真は当時の石材積みだし風景。

電動のグラインダーのないころ、石をなめらかにするには、いくつかの道具で根気強く石をたたいた。この手作業では、ピシヤンで石の表面をたたく。ピシヤンでたたいた後チョウナでたたく（小たたき）。さらになめらかにしたい時は砥石で磨くと、仕上げの目的によって使う道具を変える。時間のかかる、根気のいる仕事だ。

石工の言葉“符丁”

行き来の制限されていた江戸時代、全国を渡り歩いた石工たちには、彼らだけに通じる言葉として符丁があった（表1）。プロの技術集団として仲間が結束し、自分たちの職業を守ってきた姿が垣間見える。

第1表 石工の符丁

用語	符丁	用語	符丁
石工	モクヤ	女房	ジュライ
石	モク	親方	オモスケ
仕事	ゴト	旦那	ナガサ
道具	ミヤゴ・オモチャ	うどん・そば	ツナ
ダメにする	パンコロ	頭	クリン
上手な石工	ジョーバン	顔	ケアゲ
下手な石工	ヘタバン	目	アカリトリ
ていねい	カンショ	耳	キクラゲ
傷	イシズ	毛	ハネ
まずい・悪い	ダイコ	息子	ヤゾウ
ごはん	カネ	娘	アンズ
うまい	ハンタルイ	お金	ヤイタ
食べる	ハク	お茶	ウジ

その会話を少し紹介する。

「カネをハク」 → ご飯を食べる

「トリ ハキタイ」 → 酒が飲みたい

「ケヤキ ハンタルイ」 → お菓子がおいしい

櫛石石工4代目（現在の石工・清二の父親）は、これらの符丁を使っていた。

明治以降 櫛石を使った事例

南牧村・下仁田町付近で多く見かけるものに、石

垣、墓石、神社の灯籠などがある。下仁田町自然史館（旧青倉小学校）の敷地周囲の石垣も、櫛石を使っている。

歴史を語る建造物（明治以降）では、^{こうずけ}上野鉄道鬼ヶ沢橋梁（第17図）、下仁田町^{しらがいわ}白髪岩の原三角測点標石（第18図）、南牧村の櫛橋1号橋（第19図、口絵1）、財務省（旧大蔵省）正面玄関アーチ及び1階外壁（第20図）、太田金山城復元工事（第21図）、甘楽町の楽山園（第22図）、旧公衆衛生院（現東京都港区郷土資料館）の入り口（第23図）などがある。他にも、明治初期建造の富岡製糸場鉄水槽地下基礎部分（直径 15 m プールの地下礎石）などが知られている。



第17図 ^{こうずけ}上野鉄道鬼ヶ沢橋梁

橋台部分に櫛石使用。間に煉瓦をはさみ込んである。1897（明治30）年建造。下仁田町・富岡市指定重要文化財



第18図 原三角測点の標石

三角点の原型といえる標石であり、下仁田町と藤岡市との境界付近の白髪岩^{しらがいわ}で発見された。1882（明治15）年明治政府内務省の事業として、各地に原三角測点の標石設置が始まった。50か所ほど設置されたが、1884年に陸軍参謀本部の三角点事業に移行し、現存する原三角測点の標石が確認されたのは全国で3か所のみ。



第19図 櫛橋1号橋

昭和恐慌時代に、磐戸村（現南牧村）の救済事業として村道櫛線に地元の櫛石を用いアーチ式の石橋が建設された。1931（昭和6）年。写真提供 石井二六。



第22図 甘楽町の楽山園

平面表示整備で、縁石・敷石に使用されている。2008（平成20）年櫛石石材の出荷。



第20図 財務省（旧大蔵省）正面玄関アーチ及び1階外壁
1933～1937（昭和8～12）年建設に向けて使用された石材が切り出されている。



第23図

旧公衆衛生院（現東京都港区郷土資料館）の入り口
建築士で建築物の石材に興味を持ち、資料を丹念に調べ、櫛石と突きとめた人がいる。2024年に青木に問い合わせがあり、訪問を受けた。写真提供 許田昌路。



第21図 太田金山城復元工事

修復部分に使用。1995～1998（平成7～10）年。

忘れられがちだが生活に身近なもので、コンニャクを粉にするときに使った石臼、こたつ、火鉢、流し台などにも使われていた。現在、櫛石を使ったこうした道具は周囲から急速に姿を消し、道具の材料も様々なものになってきている。

石工の技術を伝えて160年

青木清二の先祖青木豊次郎は1861年、青木家に婿入りして、石材店を始めた。以後5代160年間にわり、青木家は櫛石の切り出し・加工を行い、伝統の技を引きついできた。石切り場には、初代からの名前を記した「石工代々の碑」がおかれている（第24図）。



第24図 石工代々の碑

清二は1953（昭和28）年生まれて中学校卒業と同時に父親のもとで技術を習得してきた。火薬を使い発破をかけ、岩盤を崩して石材を取る作業は危険を伴うため、厳しく教えられた。かつては墓石の需要



第25図
石垣用ブロック
(間知石)
げんちいし

が多かったが、やがて輸送手段の飛躍的進歩により、海外から石材が入るようになり、柵石の墓石需要は減少していった。昭和30年代から始まったのが道路わきの壁の建設で、主要な道路の擁壁に使われた。

擁壁ではブロック状に石を成型し（第25図、口絵1）、積んでいく。石の表面を四角形に成型し、裏面は不規則四角錐状で、これを積み重ねる。裏面はコンクリートで固めた。この仕事に清二は長く携わっている。石を切り出す仕事は、1970～1980年代半ばころ（昭和50年代）までがもっとも盛んだった。しかし、安価なコンクリート製の間知石の使用などから柵石の利用は減少していき、2015年頃には柵石をつかった擁壁建設は終了となった。

青木家の長い歴史の間には、大恐慌、青木家の2人の息子の戦死、戦後すぐのカスリン台風による被災での休業等、さまざまな困難があった。

今日の社会の変化の中で、かつては100人ほどが住んでいた柵集落は10人ほどになっている。柵集落にあった10軒ほどの石屋は2005年以降清二の1軒のみとなり、柵石の石工も清二ひとりとなっている。

このような中、南牧村にある「道の駅なんもく」に面した道路側面の擁壁に、コンクリートブロックでなく柵石を使うことが決まった。清二をはじめとして職人たちが柵石を組み、2025年にこの擁壁は完成した（第26図、第27図、口絵1）。日常的に人の訪れる道の駅の真向かいで、多くの人の目にふれる場所といえる。使用した柵石のブロックは3600個にのぼる。清二が手作業で作ったものだ。かつて父親から、暇だからと遊んでいるのではなく、物を作っておくようにと言われていた。ものはどこかに収まるものだ、と。3600個はその言葉どおりにコツコツと積



第26図
「道の駅オアシスなんもく」前の道路側面の擁壁工事



第27図
石積み作業

み上げた結果だった。建設時には、道の駅の一角を会場として柵石に関する展示を行った。

こうして昔ながらの技術を継承している価値が認められ2025年には、ぐんま街・人・建築顕彰会から「ぐんまの匠賞」を受賞（群馬建築士会・日本建築学会関東支部等の団体で協議を行う組織）、第67回建築士会全国大会にて伝統技能者で表彰された。

現在、柵石の石工の仕事継ぐ人は、いない。そんな中でも、石に親しんでもらおうと石切り場での音楽祭開催（第28図）、石割体験、花びんづくりなどを行っており（第29図）、小学生から大学生まで参加している。東日本大震災の時には、原発事故の放射能のために外で遊べない福島の子供たちが、石切り場での体験を行った。1985（昭和60）年頃に作られた石切り唄を披露する折には、石工道具を使つての合の手を入れる役割を担う。また、地元の学校へ出かけて、子供たちに柵石を、郷土の歴史を語っている。

「道の駅前の石垣に、地元の石がつかわれているっていうのは、本当にうれしいやね。売ってお金になればいいっていうのじゃない。ずっとこの石を愛してもらいたい。柵石を忘れてもらいたくない」

柵石石工の願いである。



第28図 音楽祭



第29図 石割体験

注

- 1) 柵石の岩石名は石英安山岩と言われてきたが、最近この用語は使わなくなってきているので、岩石名はデイサイトとする。

文献

- 佐藤興平 (2001) 群馬県南牧村砥沢の金鉱山跡調査報告書. 群馬県立自然史博物館研究報告, 5, 77-96.
- 佐藤興平 (2002) 砥沢岩体の K-Ar 年代と南牧周辺地域の新生代火成活動. 群馬県立自然史博物館研究報告, 6, 59-70.
- 佐藤興平 (2010) 群馬県南西部南牧川流域の貫入岩体: 化学組成の予察的検討. 群馬県立自然史博物館研究報告, 14, 59-70.
- 和田晴美 (2022) ぐんま鉱山研究会 その発足と活動記録. 下仁田町自然史館研究報告, 7, 57-63.

謝辞

許田昌路氏には、柵石が旧公衆衛生院（現東京都港区郷土資料館）入口に使われていることを見出していただき、さらに2024年には確認のため南牧村磐戸の石材切り出し現場まで足を運んでいただいた。深く感謝申し上げます。

参考資料

- 青木清二「柵石」: <https://aokisekizaiten.nanmokushoko.com/kunugi/>
- 群馬県南牧村 南牧びとを追って: 公式YouTubeチャンネルより
- 松林 建 山村暮らし旅ぐらし: <https://nanmokulife.com/20250411-2/>
- 許田昌路 素材渉猟記: https://note.com/m_motoda
- 和田晴美 (2017) 仲間だけに通用する世界「符丁」ー石工の世界ー. 下仁田自然学校だより くりっぺ, 98, 6-7.

(要旨)

和田晴美・青木清二 (2026) 伝統の技をつないで160年 柵石と現代の石工: 青木清二. 下仁田町自然史館研究報告, 11, 1-8.

南牧村産出の石材・柵石は江戸時代から広く利用されてきた。

この地で石材店を開いた青木家は、5代160年にわたり石工の仕事が続けてきており、現在、5代目の青木清二が古くからの石工の技術を受け継いでいる。社会の変化により需要が減り、柵石の石工は清二だけとなったが、石割体験など、人々が石と親しむための活動も行っている。